

永井路子

北条政子

角川文庫



昭和四十九年四月十五日 初版発行
昭和五十三年十月十日 十九版発行

定価は、カバーに
明記してあります

角川文庫

ほろじようまさこ
北条政子

著者 永井路子

発行者 角川春樹

印刷者 中内佐光
東京都文京区関口一ノ二四ノ八

発行所

●東京都千代田区富士見二ノ十三
●一〇二●東京③一九五二〇八

株式会社 角川書店
電話東京(265)三二(大代表)

落丁・乱丁本はお取替えいたします

Printed in Japan

曉印刷・大谷製本

0193-137201-0946(0)

北 条 政 子

永 井 路 子



角 川 文 庫

あしおと

ながあめは今日も一日降りくらした。

が、今夜だけは、あきもせずくりかえされる単調な雨の歌に、じっと聞き耳をたてていなければならない。

もうすぐ——。

雨の音の底から、ひそかにしのびよって来る足音が伝わって来るはずなのだから……。

あしおと……。

そうだ。まぎれもなく男のあしおとだ。年ごろの娘なら誰でも覚えのあるそれが、おくればせながら、やっと政子のそばに近づきつつあるのだ。

もうすぐ？ そうしたらどうしよう。

政子は思わず体を固くしてしまふ。ふいに胸苦しいまでの激しさで、乳房から、からだのしんにかけて、痛みに似たものが走った。あわてて、ほのぐらい灯から顔をそむけたとき、もうひとりの自分の少し意地悪なさやきを耳もとで聞いた。

——おばかさん。待ってるくせに……。

政子は頬ほほをほてらせて、それに小さく答えるよりほかはない。

——そうなのよ。ほんとうは待っているのよ、それを。

待っていないと言ったらうそになるだろう。すでに二十一歳、処女は政子にとってそろそろ重荷になりかけている。

ふつう、十五、六になれば男に言いよられ、まもなく女は身ごもる。それなのに、とうとう政子は今日まで男を知らずに来てしまった。

顔立ちだって、さほどいいとはいえないが、まず人並みである。あずまおんな東女のつねとして肌の色こそ白くはなかったが、浅黒い皮膚の底から、ねっとりしみ出たつやがあった。なき母親ゆずりの眼は黒眼がちにすすやかで、野性の光をたたえている。

ただ口が、ちょっとばかり大きすぎるのが泣きどころで、無口な兄の三郎にさえ、

「そうだな、それだけしゃべるには、そのくらい大きくなければな」

などとからかわれたものだが、その兄だって、

「大きいけれど、それもご愛嬌だ。あいきょう案外かわいげもあるしさ」

といってくれたではないか。

それに、北伊豆の北条といえ、ちつとは名の知れた土豪のひとり、多少の田畑、郎党も持っている。

こう並べると、嫁いぎおくれる原因はどこにもない。にもかかわらず、現実には政子はあきらかに嫁ぎおくれだった。むりにさがせば、年ごろになりかけたころ、母親が病氣になり、末の弟の五郎を生んだあとの肥立ちが悪くてとうとうこの世を去ったこと、その直後に時政に大番役が廻

って来て上洛してしまったことなどがあげられるかもしれない。大番役というのは、地方武士たちが交替でつとめる都の警固役で、出かけたら三年はもどって来ないのだ。母の看病から葬儀、そして父の出発後は、しぜん、政子は女あるじに代って乳呑子の五郎の世話をする役をひきうけねばならなくなった。

が、そんなことは言いわけで、本人さえその気になれば、男にめぐりあう機会はいくらでもあった。じじつ、つけ文をされたり、道ですれちがって、いわくありげな流し目でみつめられたりしたことは度々あったのに、どういうわけか、それ以上に進まなかったし、そのことを格別くやしとも思わなかったのがのんきすぎたのだろうか。

つまり、とりたてて理由もなく——というよりほかに言いようはないのである。いや、こんなふうに、なんの理由もなく、ずるずる機を逸するしまつの悪さこそ、いつの世にも変らぬ嫁きおくれというものの特徴なのかもしれないが……。

それが、この春——。

久々にいわくありげな男の文が届けられた。思わず、ぼうつと瞼のうえがほのあからんで来るような気がして、

——まだ私には恋が残されている。

うつとりとしたとき、耳もとで侍女のさつきがささやいた。

「葦山のお館からですよ」

年は政子より二つ下、男のうわきをするのが大好きな彼女は、まるで自分が恋文をもらったよ

うに興奮していた。

「葦山のお館」

この地方では特別な響きを持つ言葉である。この北条とは狩野^か川を隔てた小高い丘陵の上に構えられたその館には、平家の代官、山木兼隆が住んでいる。本来ならこの伊豆の国でいちばん権威のあるのは、三島にある国府の役人たちのはずなのだが、伊豆にある平家の所領の管理にやって来たというこの山木兼隆は、今をときめくその平家の一門だというふれこみなので、土地の人は別格あつかいなのである。

「まあ、この筆のあと、紙の色。ごらんなさいませ、このへんの地侍とはまるで違います」手紙をのぞきこんでいたさつきは声を上ずらせた。そういわれれば、

ぜひ一目逢瀬^{おうせ}を。お話したいことがあるのです。

御承諾なら裏の楓^{かえで}の木に御返事を……

無記名の、ごくありきたりの文句さえも、ひどく優雅なものに思われた。

「葦山のお館のどなたでしょう？ あそこには都からいらした公達^{きんだち}がたくさんいらっしゃるか……」

さつきは目を輝かせてそう言い、しつこく政子に返事をうながした。

短い政子の手紙に返事が来るより前に、さつきは早くも文使いの男と親しくなって、

「むこうではとてもお喜びですって」

早速様子をしらせて来た。その日以来さつきは妙にうきうきし、葦山と政子との交渉は、すべ

て彼女を通して行われるようになった。

そのさつきが、

「今夜あたり……」

思わせぶりの耳うちをしたのが昨日の朝だった。

いよいよ「葦山の公達」が、その名を告げる日がやって来たのである。

単調な雨脚にまじって、

ひた、ひた、ひた……。

政子の耳があきらかに人の足音を聞きわけたのは、亥の刻（午後十時）すぎだった。そしてその瞬間、政子は思わず目をつぶって、床の近くの燭を吹き消していた。

直前まで、灯を消すつもりはなかった。

はじめて見るそのひとを、ほのぐらい灯の下でじっとみつめ、やがて静かにほほえみかけて、身をなげだして激しく唇を求める——そんな恥しらずな空想が奔放にひろがっていたのに、いざとなると、処女というものは、こんなにいくじのないものか……。

だらしなく、からだがふるえる。

ひた、ひた、ひた……。

足音はさらに迫って来た。

——どうぞ誰にも気づかれませんかように。

大番で父がいないのはありがたかったが、こんなにはっきりした足音では、兄や弟妹や郎従た

ちみんなにわかつてはしまわないだろうか。

そのとき、とつぜん。

けーん。

裏山で、山犬とも狐ともつかぬ鳴声^{きうね}がした。あつ、と息を吞んだ瞬間、足音はびたりとまり、雨脚は急にはげしさを加えたのであったが……。

ふしぎなことに、これをしおに足音はぶつとりとだえてしまった。いくら耳をすましても、なにひとつ聞えはしない。ひどく長いような短いような不安と焦燥の時間がすぎたあと、政子の耳は思いがけないものを聞いたのである。

女のかすかなうめき声だ。

いやおうなしに、すぐ声のありかは知れた。かすかに灯のもれる侍女のさつきの臥所^{ふしど}——。まぎれもなく、そこから、すすり泣きともつかぬうめき声は洩^もれていたのである。

それが何かを知らないほど政子は稚^{おさな}くない。思わず背筋がびくりとふるえた瞬間、政子は足音の聞えなくなった理由を知った。

——足音は行ってしまったのだ。さつきの所へ……。

ばあつとからだじゅうの血が燃えあがるような気がして、乳房をおさえたなり、政子はその場に突伏していた。

翌日もながあめは降りやまなかった。

思いきり悪く軒端にすがっていた白いしずくが、ある瞬間、決心をつけたとでもいうように、

きらりと身をくねらせて飛びおりと、続いて、た、た、たと足早に仲間が続き、暫くすると、またためらいをくりかえす。そんな光景も、濡れそぼちた山吹が、時おり重たげに葉先をゆする庭のたたずまいも、まったく昨夜そのままだ。

政子はじっと、それを見ている。

それよりほかに眼のやりばがないからだ。

もし、予想していた通りに事が運んだら、このものうげな風景も、まるきり違った色どりをもつて、その眼に映るはずだったのに。

心中べそをかく思いでもある。いやじつをいえばそんななまやさしいものではないのだ。

——私だって、あの雨だれのように、軒端から飛びおる決心をつけていたのに……。

それなのに、残念ながら、政子は昨日のまま、依然として嫁きおくれの娘であることに変わりはないのである。

昼ちかくなつて、さつきが、おそるおそるやって来た。

「姫さま……。申しわけもございません」

何をいまさら図々しい。

返事もしないでいると、

「それが、姫さま。いろいろ訳がございました……じつは、はじめからお話ししませんといけませんのですが」

くどくどとさつきは弁解がましく並べたてた。耳はかさないつもりだったが、そのうち、

「いえ、私も、ほんとうのところ、ゆうべ使いの者にはじめて聞いたんでございますけれど……」

という言葉がふと政子の耳にひっかかった。

「え、何ですって、使いが？」

「は、はい……ゆうべ、来まして……」

頬をあからめてどもるさつきのその言葉を聞いたとき、すんと体の中から力がぬけてしまった。

なんだ、そうだったのか。つまりあの足音は、はじめからさつきの所へしのんでゆく男のものだったのだ。

——それをひとり相撲（あひむく）していた私……。ふるえたり、胸をとどろかせたり、ひっくり返ったりしたことを思い出すと、耳の奥がカーンとなるほど恥ずかしかった。

さつきはまだ喋（しゃべ）っている。

——もういいわ。おやめったら。行き違いだのなんのと言うけれど、つまりは相手にその気になかったってことじゃないの。女にとってこれ以上恥ずかしいことはないのに、そのいきさつを聞かされるのはがまんができなかった。

「いいわ、もう」

ひどく不機嫌になっているのが自分にもわかった。

——早くおかえり。いいわけより何より今はあんたの姿が目の前から消えてなくなるのが、

いちばん気のきいた心づかいだつてことがわからないの。

なにか言いたりなさそうな顔つきでさつきがひきさがったあと、政子は長道を歩きつづけたようにがっくりしていた。

——やつとひとりになれた。やれやれ。

ところが、いまましいことに、入れかわって、もう一人の自分の声が耳もとでささやくではないか。

——つまり、あんたは、ていよく、さつきたちの逢い引きのだしに使われたのさ。

くやしいけれどそうかもしれない。

——お気のどくさま。こんどもとうとう女になりそこねて。

足許のすぐそばまで来ていながら、ついと身をひるがえして引いてしまった波のように、追いかけても、もう機会はもどっては来ない。

——もてあましてるんだねえ、その体を。

やめてよ！

政子は大声で叫びそうになって慌あわてて首をふった。そんなことはない、そんなことは……と思いつつ、もしかしたら私わたしについていつもこんなふうに機会を逃がしてしまふのではないかと、内心不安になった。と、そのとき、また後で、さつきの声がした。

「姫さま、もし、姫さま」

「あ、まだそこにいたの」

心の中を見すかされたかときくりとしたが、さつきの方は、もっとおずおずとして首をふった。
「いえ、あの……お客さままでございます」

その訪問客を、あまり政子は好きではなかった。図々しくて、品が悪くて……。いや、政子だけでなく、北条一門、誰もいい顔をしない訪問客だ。

その名は安達藤九郎盛長、蛭ヶ小島の流人、前兵衛佐、源頼朝の家人である。彼が北条館にあらわれるときは、たいてい何かの無心にきまっているのだ。

「いや、佐どの（頼朝）のような浮世ばなれしたあるじを持つと、なかなかつらいもんでな」盛長は、鼻の先にしわをよせ、黄色い歯をむきだして、ひ、ひ、ひいと笑うのがくせだ。ひどい馬面で、どこことなく、笑い声も馬のいななきに似ている。

「朝から晩まで読経三昧。それが十六年という根氣のよさなんだから、まわりの方がまいってしまふよ」

鼻の頭をこすりながら、藤九郎は、蛭ヶ小島のわがあるじをいつもこう言う。

蛭ヶ小島は、北条の館の守山からは、ちょうど眼の下に見下ろされる。別に「島」ではないのだが、狩野川に抱かれた形で、いったん増水すると、すっぱり孤立して中洲のようになってしまふので、この名がある。

流されびとといっても衣食にこと欠くわけではない。重要な罪人だから、ここから程近い三島にある伊豆の国府の役人が、監視かたがた一応のめんどろを見ている。

が、それでも、時々日常の品が滞ったりすることもあるので、そんなとき藤九郎は、図々しく北条の館に押しかけて来るのだ。北条にしてみればいい迷惑だ。

が、藤九郎のほうは、そんなことはおかまいなしである。

「ほう、これはこれは……姫御前、いちだんときれいになりましたなあ」
いつものとおり、無遠慮にこういい、ひ、ひ、ひい、と高調子に笑った。

「およしなさい、藤九郎どの」

「はい、いけませんでしたか」

「それより、何か御無心か」

わざとそっけなく言うと、藤九郎は大げさに首を振った。

「これは、姫御前、心外な。藤九郎、無心ではございませぬ。米や粟など、そんなしみつたれたものを借りる気はありませんな」

「おや、そうでしたの」

「そうとも。一寸馬を借りたいだけじゃ」

「そら、やはり御無心じゃありませんか」

「いや、ちがう、借りるといっても馬は違う」

「なぜ」

「米は食べれば消えてしまうが、馬は消えぬ」

妙な理屈をいった。じつは藤九郎の妻の実家は武蔵の比企にある。そこまでちょっと行きたい

ので、と言ひ、早手廻しの借用証だ、と何やら紙きれをとりだした。

が、それを請取ってなにげなくひらいたとき、政子の顔色が、ちらと変った。紙きれは、借用証ではなかったのだ。まがうかたなく、それは恋文だった。

言わずと知れた、藤九郎のあるじ、頼朝の自筆で、

「一度ぜひ、お目にかかつて御話したいことがあります。御許しを頂けるならば、裏の楓の木に御返事を」

例の恋文とは、筆跡はあきらかに違っている。が、まるで今までのいきさつのすべてをのみこんでいるような気味の悪さ。

ふと政子は時おり守山の下道ですれちがう馬上の頼朝を思いうかべた。色白のはっきりした目鼻立ち。が、その眼は一度だって政子をみつめたことさえなかった。

またからかわれてるんだわ、私……。

藤九郎の目の前で、びりり、とそれを裂きかけて、しかし、政子の手はとまった。

なぜか、わからない。

あとになってみれば、これが「運命」というものだったかもしれない。

もしも、これが、その日のその時刻でなかったならば、おそらく、政子は、この手紙をうけられることは拒んだろう。そして、頼朝と政子は、おそらく、永遠に別々の人生を歩んでいったに違いない。

が、いま、まだその手紙は政子の手の中にある。

なにが政子の手をとめたのか？

前夜の事件からぬけきれずにいる、なかば自棄じみた心のゆらぎ。そしてなによりも胸の中のもうひとりの自分が、遠慮会釈なく指さしたあのこと。

二十一歳のからだをもてあまし、みずから火をつけずにはいられないでいる政子自身！

そんなものが、ないまぜになって、両の手の働きをとめてしまったのか……。藤九郎はまだ黄色い歯をむきだして笑っている。

「よろしいかな。証文も入れましたで、馬は借りますぞ」

ひ、ひ、ひいと声高に笑ってはいるが、その眼は、ちっとも笑っていないことに気がついたのはこのときだ。

——こわいひとだ、藤九郎どのは……。

が藤九郎はわざと声高に喋^{しゃべ}っている。

「女房めがうるそうてな。早く実家へゆけとぬかす。母者に衣を貰^{もら}うてこいとぬかす。歌などよみくさって、自分では裁ち縫いもようせんのじゃ」

そのくせ、藤九郎は、自分の妻が、かつて宮仕えをし、相当の歌よみであることが自慢らしいのだ。立ちあがるとき、もう一度彼は念を押した。

「借りましたぞ。もし馬が戻らねば、証文もって取りにおじゃれ」

政子は彼の言う意味を理解した。恐らく馬は戻って来ないだろう。そして蛭ヶ小島の館に、今度は政子が足音をひびかせる番なのだ、と……。